

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 龔 柏榮

論文題目 日本語教育文法における「部分否定表現」の研究

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	鷺見幸美
委 員	名古屋大学教授	杉村泰
委 員	名古屋大学教授	林誠
委 員	名古屋大学准教授	志波彩子

本論文は、日本語教育文法の立場に立ち、3つの部分否定表現「ワケデハナイ」「トハカギラナイ」「ノデハナイ」を対象とし、日本語学習者が3つの表現を理解・産出する際に使用できる情報を記述することを目的として、コーパス調査をもとに、分析を行ったものである。

これらの部分否定表現はいずれも聞き手の考えを否定するという点で共通しており、日本語学において研究・記述が進んでいる。また、日本語学の研究の知見を活かす形で、日本語教師・日本語学習者を対象とした文法解説書においても説明がされている。しかし、従来の記述はいわゆる「日本語学の視点」での記述であり、内省によって導かれた抽象的な記述であるため、日本語学習者にとって、その異同を明確に理解することが難しく、学習者が部分否定表現を使い分けるための具体的な情報を提供できていない。本論文は、これら3形式の「学習者の視点」での記述を目的とし、コーパスを使用した分析により、従来詳細に記述されていない、共起しやすい表現、否定されやすい要素、使用されやすい環境を明らかにしている。

本論文は8章からなる。以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

### 【本論文の概要】

第1章では序論として、本研究の研究背景、目的と考察対象、研究方法、使用コーパス、援用する概念、本論文の構成について述べている。

第2章では、日本語教育文法と部分否定表現の研究現状を概観した上で、日本語教育文法の観点から部分否定表現を研究する必要性について述べている。「日本語教育文法」については、日本語教育文法が誕生した経緯、日本語記述文法との関係、日本語教育文法が目指すものを詳細に紹介した上で、本論文の「日本語教育文法」としての立場を確認し、「100%を目指さない文法」を志向して、典型的部分否定表現である「ワケデハナイ」「トハカギラナイ」については「共起しやすい表現」、非典型的部分否定表現である「ノデハナイ」については「否定される要素」に着目して分析・記述することを述べている。また、学習者視点での類義表現の記述には、「使用環境の選好傾向」の記述が重要であるという先行研究の指摘を取り上げ、「前接語句の選好傾向」「文中での出現位置」「使用されるジャンル」に着目して、類義表現「ワケデハナイ」と「トハカギラナイ」、「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」を分析・記述することを述べている。さらに、「部分否定表現」については、日本語学における主要な先行研究を取り上げて、部分否定表現は「共起表現」「否定される要素」の分析が重要となることを示した上で、日本語教師・日本語学習者を対象とした文法解説書では「共起表現」「否定される要素」が十分に明示されていないことを指摘している。

第3章から第5章は、『現代書き言葉均衡コーパス（データバージョン1.1）』から抽出した用例を対象とし、各形式を個別に分析・記述している。まず、第3章は、「ワケデハナイ」を分析・記述している。コーパス調査により得られた12833例の中から、ランダムに抽出した300例を分析対象とし、「ワケデハナイ」がどのような表現と共起しやすいかを調べ、共起しやすい表現によって「ワケデハナイ」を分類した上で、各類について【実在事態と推論事態の関係】と【機能】との関係を分析している。結果として、①「必ずしも」と共起しやすい「逆接の条件」、②「だからといって、とは言っても、であっても（＋必ずしも）」と共起しやすい「不成立の可能性」、③「すべて、完全に、必ず、いつも、常に」と共起しやすい「極端(全体・必然・高頻度)」、④「まったく、全然」と共起しやすい「打ち消しの強調」、⑤「特に、別に」と共起しやすい「取り立て」の5類に分けて、それぞれについて、【実在事態と推論事態の関係】と【機能】との関係を記述している。これらの5類は、分

析対象 300 例の 65% をカバーしている。

次に、第 4 章では、「トハカギリナイ」を分析・記述している。コーパス調査により得られた 1747 例の中から、ランダムに抽出した 300 例を分析対象とし、「トハカギリナイ」がどのような表現と共起しやすいかを調べ、共起しやすい表現によって「トハカギリナイ」を分類した上で、各類について

【一般論と可能性の関係】と【機能】との関係を分析している。結果として、①「必ずしも」と共起しやすい「不成立の可能性」、②「だからといって、とは言っても、であっても（＋必ずしも）」と共起しやすい「逆接の条件」、③「さえ、だけ、ばかり、ば、～場合」と共起しやすい「取り立て（限定・条件）」、④「すべて、完全に、必ず、常に、永遠に、いつでも」と共起しやすい「極端（全体・必然・高頻度）」の 4 類に分けて、それぞれについて、【一般論と可能性の関係】と【機能】との関係を記述している。これらの 4 類は、分析対象 300 例の 70.3% をカバーしている。

最後に、第 5 章では、「ノデハナイ」を分析・記述している。コーパス調査により得られた 8048 例の中から、ランダムに抽出した 300 例を分析対象とし、「ノデハナイ」がどのような要素を否定するのかを調べ、否定される要素によって「ノデハナイ」を分類している。結果として、否定されやすい要素を①「必須格（が、を、に）」、②「必須格以外の格成分（で、から、へ）」、③「複合格助詞を含む成分（を通じて、に応じて、ために、のせいで）」、④「副詞（ただ、単に、全部、まったく）」の 4 類に分類している。これら 4 類に分類された「ノデハナイ」は、分析対象 300 例の 66.3% をカバーしている。

第 6 章と第 7 章は、類義表現の分析と指導法の提案である。まず、第 6 章では、第 3 章と第 4 章で考察した「ワケデハナイ」と「トハカギリナイ」を類義表現として取り上げている。「ワケデハナイ」と「トハカギリナイ」のうち、類義関係が成り立つ〈不成立の可能性〉〈逆接の条件〉〈極端（全体・必然・高頻度）〉の 3 類のみを考察対象とし、言語内的要素にあたる「前接語句」の種類を調査することによって、その傾向を明らかにしている。その結果を踏まえ、日本語学習者に図 1 のような情報を提供することを提案している。

次に、第 7 章では、第 3 章と第 5 章で考察した「ワケデハナイ」と「ノデハナイ」を類義表現として取り上げ、媒体の差による使用実態の差異を分析するため、書き言葉コーパスの『現代書き言葉均衡コーパス（データバージョン 1.1）』に加え、話しことばコーパスの『名大会話コーパス』と『現日研・職場談話コーパス』から抽出されたデータを用いている。言語外的要素にあたる「ジャンル」と、言語内的要素にあたる「出現位置」に着目して使用環境を調査し、その傾向を明らかにしている。その結果を踏まえ、日本語学習者に図 2 のような情報を提供することを提案している。

第 8 章では、結論として、本研究で明らかにした内容をまとめ、今後の課題について述べている。

### 【本論文の評価】

本論文は、日本語学習者の非用・誤用が観察され、その習得が容易ではないと推測される部分否定表現について、「日本語学習者の適切な使用」につなげるための記述を追究した力作である。部分否定表現は、これまでの研究の蓄積もあるが、「日本語教育文法」という研究の立場を明確にし、コーパス調査に基づいて、丁寧、かつ、詳細に用例を観察し、従来の研究にはない「学習者にとって必要な具体的な情報」の分析・記述がされている点で評価できる。

一方、審査委員からは、以下のような指摘もなされた。1) より精緻な分析、わかりやすい記

述にするため、3形式の分析・記述の方法を統一するとよい。2)本研究の着眼点や明らかになったことと「構造」や「意味」との関連性について、考察を深めるとよい。3)「日本語教育文法」としての研究の意義を示すには、本研究で記述されたことが、本当に学習者にとって必要な情報であり、非用・誤用を防ぐことができるのかという検証がされるとよい。これらの指摘は、本論文には改善すべき点、課題が残されていることを示してはいるものの、日本語教育に貢献する有用な成果が十分に認められる論文であると評価できる。

以上の評価に基づき、審査員は全員一致して、本論文が博士学位論文としてその水準に達していると判断した。

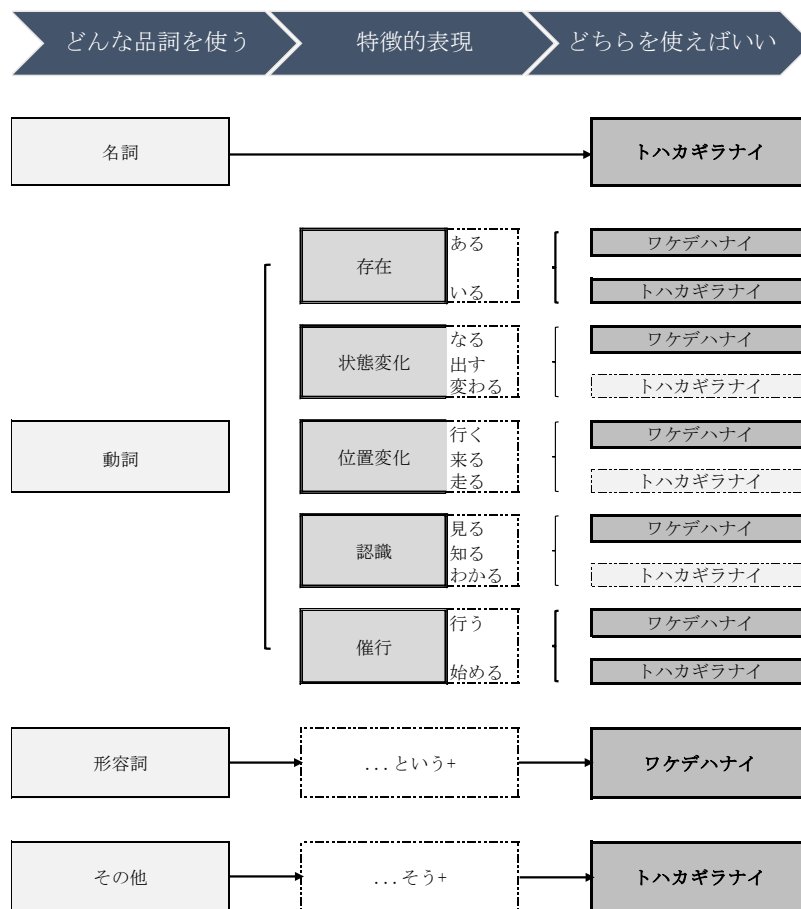


図1 前接語句からみる「ワケデハナイ」と「トハカギリナイ」の使い分け

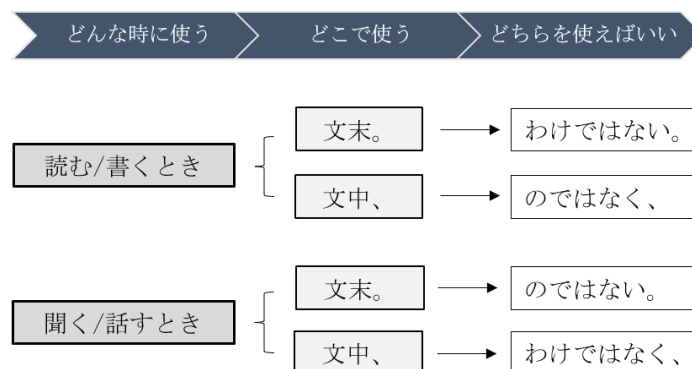


図2 4技能と使用位置からみる「ワケデハナイ」と「トハカギリナイ」の使い分け